

平成28年度 第1回精華町総合教育会議 議事録

- 1 開 会 平成28年7月11日（月） 午後2時00分
閉 会 平成28年7月11日（月） 午後4時00分

- 2 出席構成者 木村精華町長 伊藤教育委員長 中谷委員 蓑毛委員
細川委員 太田教育長 （欠席構成員なし）

- 3 出席事務局職員
岩橋総務部長 浦本総務部次長 岩前健康福祉環境部長
大原企画調整課長 山崎企画調整課担当係長 鵜飼企画調整課
嘱託（「科学のまちの子どもたち」プロジェクトコーディネーター）
岩崎教育部長 北澤総括指導主事
竹島学校教育課長 仲村生涯学習課長

- 4 傍 聴 者 2名

5 会議の概要

（1）開会

総務部長から第1回総合教育会議の開会を宣言。

ー町長あいさつー

○木村町長

第1回の精華町総合教育会議に当たりまして、ご挨拶を申し上げます。

伊藤教育委員長様をはじめ、教育委員の皆様にも本町の教育発展に一方ならぬご尽力をいただいておりますこと、この場をおかりいたしましてお礼を申し上げます。

さて、昨年4月より、新しい教育委員会制度がスタートいたしました。この教育委員会制度改革の一つとして、本町でも教育委員会の皆様と私とで総合教育会議を設置いたしました。昨年度は3回にわたり会議を開催し、熱心なご議論を重ねていただき、本町の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を策定することができました。

これから、この教育大綱をもとに、教育のまちづくりを進めていくわけでありま

すが、本日はまず教育現場の現状などにつきましてご報告をいただき、課題の共有を図り、さまざまなご意見を頂戴しながら、よりよい方向へ進めてまいりたいと考えております。

「こどもを守る町」宣言を行いました先人の思いを受け継ぎ、本町の教育のまちづくりが充実したものとなりますよう、ここにおいでの皆様と心を一にして進めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

—教育委員長あいさつ—

○伊藤教育委員長

昨年度の6月に第1回総合教育会議という新しい枠組みでスタートを切ってから、教育大綱に関連して様々な検討を行って来ました。改めて今までの資料を振り返りますと、様々な意見を交わしながら精いっぱい議論を行い、良いものが出来たと実感を持っています。

しかし、これが本当に現場に合った生き生きとしたものになるのか、これが2年目の大きな課題だろうというふうに思いながら進めてまいりたいと思っております。

また、この総合教育会議が大きな意義を持つと感じたのは、我々がいろんな現場へ出かけ現状を知り、我々も現場と共に汗をかかないといけないという思いを持ったとき、町長様も含めて意見交換する中でより良い方向へ実現していくという、これも総合教育会議の大きな意義であると感じています。

幸いにもこの精華町は、関西文化学術研究都市の中にあり、今後、大きな夢とロマンを秘めた街であります。子どもたちにもそういったものに触れながら、特色もった教育で子どもたちの成長に役立てていきたい。そのための知恵を我々大人が絞り、一歩ずつ前進していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(2) 出席者紹介

司会の総務部長より構成員及び事務局の紹介

(3) 教育施策について

—今回は、調整事項がなく、報告と意見交換のみのため、設置要綱第4条に基づき
司会は引き続き総務部長が行う—

○岩橋総務部長

この会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基き、大きく3つの役

割がありました。

1つ目は、教育大綱を策定すること。

2つ目は、教育大綱に基づいて重点的に教育施策を講じていくという役割。

3つ目は、児童生徒の生命にかかわるような重大な危機管理事象に臨機に対応していくということ。

1つ目の教育大綱に関しては昨年策定しましたので、今年はそのフォローアップという部分はありますが、主に2つ目の重点的な教育施策の構築など、そういった部分をどうしていくか意見交換していくというのが中心になるかと思います。

そのため、第1回目の会議では、精華町の教育の現状について教育委員会より報告いただき、今の精華町の教育における重点課題の共有を図れたらというのが狙いが1つ、また2つ目に、昨年定めた教育大綱の柱の一つであります「学研都市を活かした教育の推進」、これについては今年度の木村町長の施政方針でも大きく掲げておりますが、これについて、2つのプロジェクトが町長部局側を中心に進んでおります。

1つは「科学のまちの子どもたち」プロジェクト、それから、地方創生に関連したシティープロモーションの中の取り組みの一つとして、デジタルミュージアムを核とする「せいか舎」プロジェクト、この2つのプロジェクトについて、町長部局側から報告をさせていただき、意見交換ができればと考えております。

－教育の現状等について－

○北澤総括指導主事

資料1の学校教育・社会教育指導の重点について、学校教育指導の重点と社会教育指導の重点に加え、重点的に取り組みソフト事業をまとめた、せいか学びと育ちプランの3部構成になっています。また、今年度の指導の重点は、昨年度定められた精華町教育大綱の5つの方針、「未来を生き抜く子どもの育成」、「学研都市を活かした教育の推進」、「家庭・地域社会の教育力の向上」、「命を守り人権を大切に共生社会づくり」、「教育の質を高める環境の整備」、これらを柱として5つの構成に組み替え、整理しております。

資料2の児童生徒数について、まず小学校では、平成20年度、21、22年度の3年間をピークに減少しつつあります。平成28年度は2,356名で、平成15年度とおおよそ同じ人数になっております。中学校では、平成23、24、25年度をピークに減少傾向にあります。今後の推移として、小中とも減少傾向にあります。

資料3の学力の状況について、平成27年度に実施された小学校6年生と中学3年生を対象に行われました、全国学力・学習状況調査の結果をあらわしております。国語・算数（数学）問題に加え、平成27年度から小・中学校とも理科でも実施されています。精華町全体の特徴としては、小学校6年生、中学3年生の全ての教科において全国平均を上回る結果となっておりますが、学校間においては差がございますので、詳細な分析を行い、学習指導の改善に生かしているところでございます。

今回、特に顕著な例として小学6年生も同じ傾向ですが、質問紙調査において特に中学3年生で、将来、理科や科学技術に関する仕事につきたいと思いませんかという質問に対し、「当てはまる」という回答が、全国の倍以上の数値を示しております。

資料4の卒業後の進路状況について、平成27年度は地元公立中学校へ86.8%が進学、中学校から高等学校への進学は、94.8%が全日制高校に進学しております。平成27年度の全体の傾向としては、全日制公立高校への進学者は増加し、逆に全日制的私立高校への進学者は減少しております。また、定時制、通信制高校への進学者は若干の増加がありました。

資料5の生徒指導の状況について、問題行動全体では、小学校で少し増加し、中学校では減少という結果でした。生徒同士の暴力事象は小・中学校とも若干の増加が見られました。不登校児童生徒の状況については、年々増加傾向となっております。特に平成25年度から26年度にかけて顕著な増加が見られました。各校では危機感を持ち、家庭との連携を密にとり、きめ細やかに取り組みを進めているところでございます。

資料6のいじめ調査集計表について、アンケートや聞き取り調査、複数の教師による観察などで行った結果となっております。第1段階は児童生徒が心身の苦痛を感じているもの、第2段階は組織的、継続的に指導や観察が必要なもの、第3段階は生命や心身、財産に重大な被害が生じる場合という分類となっております。第1段階では、小学校で235件、中学校では、37件となっております。第2段階では小学校で1件あり、卒業を迎え解消まで至らなかった事象がございました。中学校においても第2段階が1件ありましたが、これは解消することができました。第3段階においては小・中学校とも0件となっております。いじめ問題については、精華町内全ての学校において基本方針を策定し、組織的に取り組みを進めているところでございます。

資料7の教職員の年齢構成について、40代が極めて少なく、20代、30代の

若手教員が6割近くを占め、今後の円滑な世代交代が大切になってくると思われ
ます。

○竹島学校教育課長

資料8の要保護・準要保護児童生徒の状況について、昨今の厳しい社会経済状況
の中におきまして、要・準要保護比率が21年度5.5%から28年度では9.
0%と年々増加傾向という状況でございます。主な要因としては、経済的な理由と
いうのが一番大きく、児童扶養手当が支給されたひとり親世帯の方々への援助が大
きな部分を占めております。制度の周知については、学校でのプリント配布や母子
(父子)家庭となった場合など、各種の援助のお知らせを行うなど、漏れなく伝え
るよう取り組んでいるところでございます。一方、援助率の増加は全国的に見ても
同様な形で推移をしており、25年度の要保護・準要保護比率が15.42%でし
た。調査が開始された平成7年度から上昇し、初めて25年度に若干の減少に転じ
ましたが、依然として6人に1人程度の高どまり傾向となっているところでござい
ます。また、都道府県別に見ますと、京都府全体では19.99%であり、国、府
と比較すればまだ低い状態ですが、本町でも年々増加しているということから、子
どもの貧困対策につきましては引き続き見守っていく必要があると考えているとこ
ろでございます。

○仲村生涯学習課長

資料9の学校・地域・家庭の連携に係る社会教育の取り組みについて、生涯
学習課では児童生徒に関する取り組みとして、大きく6つの事業を行っているところ
でございます。まず1番目、社会教育委員会では教育委員会に対して提言を行
っていただいたところで、今年度においてはその提言を生かした取り組みを進めて
いきたいと考えております。2番目、青少年健全育成事業では、家庭教育、子ども
議会、PTA、青少年健全育成協議会、次世代の親となる中学生を対象とした子育て
講座がございます。この中で子ども議会につきましては、昨年度より選挙権の1
8歳への引き下げや子どもの政治離れなどの背景から、より充実した子ども議会に
するため内容の見直しを進めており、特に分科会でございますまちづくり委員会に
おきましてはより自由な意見交換ができるよう、今年度においても2つの分科会に
分けて実施する予定でございます。青少年健全育成協議会は、新入生に対しての防
犯ブザーの配布、夜間パトロールや街頭啓発、標語の募集や「少年の主張」の大会
の開催などがございます。3番目、子ども祭り事業でございますが、昨年度は3月
に実施しましたが、今年度においては通年どおり10月実施予定とさせていただい

ております。4番目、地域で子どもを育てる連絡協議会でございます。主な活動といたしましては、駅前及び学校等で実施しております拡大あいさつ運動がございます。5番目、精華まなび体験教室事業でございます。この事業は子どもたちの居場所づくりとして、学校教育以外の文化活動や体育活動を行うものでございます。このうち、川西小学校、山田荘小学校の参加人数が毎回100名を超えており、その運営が大変難しくなっており、今後その運営の見直しを検討しているところでございます。6番目、学校支援地域本部事業でございます。これは町内各中学校区ごとに学校を地域で支えることを目的として平成20年度より精華南中学校区より順次立ち上がり、現在では3中学校区全てにおいて実施されております。各校区にコーディネーターを配置し、地域におけるコミュニティスクールの実施や学校周辺の清掃活動を実施など、各校区とも精力的に活動されております。

資料10の家庭教育の充実、青少年の健全育成の提言について、社会教育委員会からこの4月に教育委員会に提出されました。この提言書では社会教育委員が各分科会に分かれて検討し、その主なテーマとして①家庭教育の充実、②青少年の健全育成を掲げ作成されたもので、今後どのような取り組みが必要とされるかについて、現在の社会状況を的確に捉えながら提言されたものでございます。

この提言の結びにおいて、「子どもと子育てを地域社会全体で見守り支援する」ということを基本理念として、社会総がかりで取り組む教育を一層推進するため、関係部局が互いに連携することが重要であるとされております。教育委員会ではこの提言を真摯に受けとめ、今後の取り組みに生かしていきたいと考えております。

－意見交換－

○養毛教育委員

子どもの貧困対策の関係について、全国と比較すると低い数値ではありますが、精華町も影響を受けていることは確かです。限られた予算の中でどう分配していくか大変難しいと思いますが、その中できちんと教育を受けられるような環境を整えて頂いており感謝をしております。

また、不登校についてですが、数値的にも増加傾向が気になります。全国的に見ると少ないのですが、進学後のフォローアップなど今後も必要ではないでしょうか。全体割合からすれば少ないですが、1人ひとり大切にしていこうという意味でも見守っていく必要があると感じます。

○細川教育委員

教育大綱を定めることができ、今後それが様々な場面で生かされていくという段

階だだと思います。現段階でどれぐらい町民の皆さんに浸透しているのか、まだわからないところですが、学校の先生方にももちろんこれは協力していただいて、私たちと同じ認識のもと教育のまちづくりが進められればよいと願っております。

事務局からの説明を聞かせていただいた中で、学力の状況では、府の平均よりも少し上回っているという状況ですが、正解する子どもたちがいるのと同時に未回答の子どもたちが減っていかないという現状もあると思います。

家庭の事情で教育の機会が与えられないことも実際にはまだまだあるかと思えますし、それにより学力に違いが起こり、それに起因したいじめなどの負の連鎖はあってはならないと思います。そのためにも就学援助と言う金銭的な面の充実と、先生方のますますきめ細かい目配り、気配り、またこれらは先生方に頼ってばかりではなく、精華町には様々な組織がございます。あらゆる場面で子どもたちに触れ合う機会を持っていただき、町全体で子どもたちをフォローしていく、教育大綱にあるような、子どもたちが輝いて生涯生き生きとした人を育む学研都市精華町をめざせればと思います。

○中谷教育委員長職務代理者

まず1つ目、全国の学力・学習状況調査の結果から、全国平均を超えている状況で良い傾向だと思います。しかし、その中には学力の二極化と言う部分も潜んでいるのではないのでしょうか。どこに基準を置くかという部分もありますが、平均正答率が50%の子どもがどれだけいるのかという分析も重要ではないかと思っています。子どもたちの学力を少しでも充実して基礎学力をつけていくということが重要なことではないかなと思います。

そのためには小学校、中学校の授業の質を高めるということはもちろんですが、保育所、幼稚園との連携も深めていく必要があるかなと思います。就学前教育の充実を図るということは、小学校、中学校に続く学習意欲を高める上においても重要なことだと思うので、保育所、幼稚園ともども連携をとりながら進める必要があるかと思っています。

2つ目に、不登校の問題について。年々増加傾向という事ですが、その中には様々な要因があろうかと思っています。家庭的なこともあれば子どもの個別の問題もあるでしょうが、いずれ高校を卒業し、子どもたち自らが家庭、地域、あるいは社会とともに自分の能力を最大限に生かし歩んでいかなければならないので、小学校、中学校での不登校問題を早期に解決出来るよう、様々な角度からフォローを行うことが必要だと感じますし、これが将来の精華町を支えるためにも大切ではないかと

思います。

3つ目に、社会教育分野の関係で様々な行事に参加する場面があり、例えば、こども祭りでも中学生のボランティアが各ブースのほうで活躍しているなど、小学生、中学生の活躍する場面が多いと感じています。こういった精華の子どもたちが頑張っている姿をもう少し町民の方々にも知ってもらい、みんなで見守る、分かり合えるという事も必要ではないでしょうか。

○伊藤教育委員長

各教育委員さんの発言をお聞きし、すばらしい分析でよく研究されていると受け止めました。

様々な課題がありますが、現場出身の者の感覚からすると、これだけのものを消化しようというのは非常に困難です。ほとんどが消化不良で、その都度、適当な薬を入れ、うまく消化させるような取り組みが適宜必要であろうかと思えます。

極端な言い方をするかもしれませんが、私が現場で働いた経験では、地域や家庭の連携と言ってもなかなかうまく進みません。保護者や地域の方に理解して頂き協力して進めていくことも、ほとんどが単発的で、継続していくにも大変苦勞がありました。

しかし、20年経ってようやく気付いたのは、「子どもが変わってくれる姿」を見ることで地域の大人が変わることです。学校現場で子どもと関わっている教師が子どもたちの様々な個性を受け止めながら、情熱、愛情などを注ぎ、子どもたちが目覚めたとき、今までとは違った自分の子ども、地域の子どもの姿に保護者や地域の人々が「これならば協力する」という形になる。しかし、そこまで持っていくにはものすごく時間がかかります。

例を挙げますと、今はなくなりましたが選択履修というものがあり、学校によって年間時数がある程度決められるというものでした。この選択履修に取り組むにあたり、従来のカリキュラムに最低限必要な授業実数を確保し、残りの時間は子どもたちが学びたい授業の希望を取りました。

結果、パソコン操作に関する講座、災害時に自分たちで生き抜くためのサバイバル講座など、当時教育現場になかった10講座が子どもから提案されました。

普段、中学校の授業参観では、親が学校に来るのを嫌がる子どももいます。勉強が得意で授業で手を挙げて答えられる子どもは問題ないですが、親がたくさん来ている前で答えられず、傷つき、不満をためる子どももいます。しかし、そのサバイバル講座の時は親に対して子どもが「来てや、来るんやで、休んででも来いや」っ

というんですよ。サバイバル講座の授業参観のとき、何をするかというとき大きな建物の3階の上からロープをつかって壁を蹴って降りるんです。

校長としては非常に怖い思いをしましたが、保護者も普段学校に来て欲しいなんて言わない子どもが、学校に来て欲しいなど、よほどのことだと思われたはずです。

このように、学校というところは「子どもたちが主役」で、子どもたちが伸び伸びと安心して活躍できる場に、大人がいかんにしてやれるかということです。

そのためには1つの学校経営する管理職のマネジメントが重要です。1年、2年では変わりませんが3年～4年頑張れば変わっていきます。校長さんは学校以外にも様々なところに足を向けます。普段、何も無いときでも保護者と地域の方々の声を聞き、それを学校経営に活かしていく。

自分は学校をこういう風にしたいという気迫で学校を変えよう、子どもたちが生き生きと安心して活動できるような学校にしようと思わない限り、幾ら立派なものをつくっても消化不良で終わってしまう恐れがあると思います。

我々はこの総合教育会議の中で現場に対して何を望むかということを実際に考えていきたい、そういうふうに思っています。

○木村町長

伊藤委員長を初め、委員の皆さんからも教育の現状を受けた分析の中で、学力や子どもの貧困、そういうことに対する心配やご指摘をいただきました。

精華町の教育のあり方についてここまで議論ができ、また実践においても様々な角度から、住民の方々が教育にかかわっていただける町となってきたということについては、非常に誇りに思っています。

ただ、伊藤委員長からもありましたが、全てを満たすということについては非常に難しい要素もあるわけです。行政だけが幾ら旗を振っても、教育委員会が幾ら汗をかいても、そのことが必ず良い方向に向かうということではありません。

やはり地域社会を構成する全ての人、団体が心を一にするということが重要で、そのためにも教育大綱を一人でも多くの人たちに理解をしていただく必要があります。その中で様々な場面に参画、協力、連携というところにしっかりと繋いでいくということが大切ではないかと思っています。

家庭崩壊、食の崩壊、自分の子どもさえよければ良いという考え方をする人が増え、我々の時代とは大きく変わり非常に難しい時代になっているのではないのでしょうか。これらのことは行政にとっても当然大きな課題であります。決して無視することではなく最低限、行政として進めなければならないことを我々もしっかり見つ

める必要があり、これらの問題に対しては、様々な財源を確保しながら、教育行政が進めているのではないかと思います。その一つが防衛省の調整交付金なんです。我々はそういうことも十分生かしながら、他にはない町をつくるという、そのことに全力を挙げております。

また、学研都市と住民とがどう関わり合いを持つかと言う事ですが、この素晴らしい環境の中で子どもたちが学ぶことによって次の時代をしっかりと守り育てていくため、「科学のまち子どもたちプロジェクト」を初めとして、精華中学校における「コミュニティスクール」、またそれぞれの学校でも地域社会にいろんな面で参画をいただけるような町として行政の推進をさせていただいています。

しかし、今の不登校問題でも個々に中身は違うと思いますが、どうすれば改善に向かうのか、あるいは学力の問題についても、能力、学力がある子どもたちも良好な友達関係がしっかり持てない、そういうことの課題提供もされており、教育の現場での複数的な絡みによって様々な問題が起っていると感じたわけです。

今それぞれお話しいただいた意見を皆さんと一緒に知恵を出し合い、積極的なご意見を聞かせていただき、ともに町行政と教育行政が一体となって、この大綱の意味する目的に沿って頑張ればと思っております。

○太田教育長

不登校の問題ですが、一昨年から急に不登校の数字が増加し、なかなか減少しません。個々の具体的なケースを見ていきますと、千差万別ですが、やはり親の学校に対する期待の問題、子どもに対する期待の問題、それがうまくいかないということで、それをどのように考えていけば良いのかいうところで今、暗中模索しているというのが実態ではないか。そういうことに対し、残念ながら学校では適切な対応がとれていないという実態があらうかと思えます。

これは家庭と教師の信頼関係も一つ問題になっていると思います。教員の年齢構成を見るとわかりますように、ここ10年で教師の年齢構成が大きく変わり、20代、30代の教師が半分を占めるという時代に入ってきています。それだけエネルギーがあるわけですが、先ほどの家庭との対応にしても、親の気持ちを重々酌んで話を聞くということについてはまだまだ課題があるような気がします。

また、リーダーシップという話も出ましたが、管理職自体が若返ってきています。ここ数年でまた多くの管理職の世代交代を迎え、その次を支える40代から50代の初めにかけての教師が非常に少なくなっている、そういった問題がありますので、できるだけそういう社会の動きや人の気持ちをどう酌むとかというようなことを含

めでの研修を、研修会や職員室でも先輩から学び取ってもらう必要があります。今年度も、町の教職員全員を対象にした研修会を行いました。これで終わりにせず、学校での様々な研修に結びつけて進めていきたいと考えています。

○岩橋総務部長

幾つか重点的な課題として取り上げるべきものがクローズアップされたと思います。またこれについては、今後の取り組みにつなげていくためにどうしていくか、それらを施策にどう反映させていくかというところは、今後事務局で整理したいと思います。

ー学研都市を活かした教育の推進についてー

○岩橋総務部長

学研都市を活かした教育の推進に関して、町長部局が取り組んでいる内容を報告をさせていただき、その後、自由な意見交換をお願いしたいと思います。

○大原企画調整課長

学研都市を活かした教育の推進ということで、その取り組み状況について報告をさせていただきます。

まず、冒頭には、「せいか歴史物語」という冊子の結びの言葉として、元京都府立大学の学長で精華町の町史編さん事業でお世話になりました、故・門脇禎二先生のお言葉を掲載しておりますが、この言葉に込められました思いが今日の精華町における教育のまちづくりへと脈々と引き継がれており、国際的にも最先端の近代科学の成果を学ぶ「科学のまちの子どもたちプロジェクト」と、また古くからの伝統文化、歴史的達成を学ぶ「せいか舎プロジェクト」の2つの教育プロジェクトの展開に至っています。

1つ目の「科学のまちの子どもたちプロジェクト」は、学研都市の研究機関と地域の学校との交流、連携の促進と、子どもたちの科学に対する憧れや好奇心を育てることを目的として、学研都市の中心地である精華町の特徴を生かした多様な学びの機会を地域の子どもたちへ提供するための活動です。

主な活動として、①学校単位での研究施設及び企業訪問に際し、訪問先のコーディネート、②町立学校における新規採用教員の研修のサポートとして、理科の実験実習などのコーディネート、③学研都市の研究者らによります出前事業のコーディネート、④科学イベントの企画と運営として、ひとつは「けいはんな情報通信フェア」にあわせ、中高生らによる研究成果の発表の場を設け、学研都市の研究者との相互交流の機会を提供、もうひとつは平成26年度から開催をしている、「けいは

んな科学体験フェスティバル」を通じた、子どもたちが科学の不思議や面白さを体験する機会の提供、⑤9つのプログラムを1年間を通じて体験し学ぶ「けいはんな科学体験プログラム」の開催、⑥物づくりの楽しさを体験する「ロボット工作教室」、⑦その他、ロボットフェスティバルの開催、学研都市を代表する研究機関の研究内容を科学絵本を使ってわかりやすく紹介するといったような取り組みを展開しています。

次に、2つ目の「せいか舎プロジェクト」について。このプロジェクトは、昔の農具や民具、また昔の精華町の写真をデジタル化して、インターネット上で紹介するデジタルミュージアム、すなわちWEB上の歴史民俗博物館の取り組みです。

精華町には先人たちが使われた民具、約1,600点が保管をされており、そのうち食事道具など約40点をこのデジタルミュージアムで公開をしており、今後、農具などの公開も予定をしています。

現在、デジタルミュージアムで紹介している民具には、小学校の低学年でも読めるように、漢字にルビを振り、その民具がどういった使われ方をするかなど、イラストを入れながら解説しています。今後、こういった民具を実際に使ってこられたお年寄りと今の子どもたちとの世代間交流ができないか考えてるところでございます。

—意見交換—

○細川教育委員

学研都市ということで、子どもたちもそれに触れる機会があり、本当に素晴らしいことだと思います。

平成26年度から「科学体験フェスティバル」に私も参加させていただき見てみますと、小学生の低学年から高学年までいろんな方がおられ、中には中学生かなというような子どもも見受けられたりします。

もちろん町内だけではなく、遠くから毎年来ているんだよというような話もお伺いしますし、とても熱心に子どもはもちろん親御さんも一緒になって楽しんで話を聞いたり、実験など後ろで一生懸命にビデオや写真を撮りながらお話を聞いてらっしゃるのを見受けます。こんなにたくさんの方々が楽しみにしておられますので、もっとPRをすべき大きなイベントだと思っています。

出前授業に関しては、確かに様々な企業の方が来られているのはとても素晴らしいことだと思うのですが、やはり学校に偏りがあるのが一番懸念されることと思います。できれば均等というのなかなか難しいとは思いますが、ぜひ機会をもつ

と増やしていただければと思っています。

この科学体験プログラムに関しては、どれぐらいの参加実績があるのでしょうか。

○鵜飼コーディネーター

早いものは6月から動いておりまして、主に夏休みから始まるものが多くなっています。年間を通じてということで、それぞれ各月に1回ずつ、場所としては精華町役場の会議室や、けいはんな記念公園、東光小学校などを借りまして実施しております。チラシを各学校に、大体、3年生以上とか4年生以上とかプログラムによって決まっておりまして、生徒さん1人ずつに配布しており、毎日のように申し込みを頂いております。

○北澤総括指導主事

出前授業については、理科教育推進委員会の中でいろいろ調整をしています。確かに東光小学校の開催が多いですが、精北小学校や山田荘小学校でもそれなりの回数を実施しております。授業の進度が大体どこの学校も同じように進んでいるので、調整が難しい部分はあります。

○伊藤教育委員長

学研都市の研究施設が立地して20年数年経過し、その時代の子どもたちも立派な社会人として活躍していると思うが、その子たちは最終的にこの学研都市の研究施設に就職して活動しているというような実数はわかりますか。私はそういうものが増えて精華町へ戻ってきてくれたら、その子たちに出前授業の中で携わってほしいと願っております。ここで育った者が様々な経験を経て精華町に戻り次の世代に伝える、そういった先輩が育ってくれば、こんな嬉しいことはないと思っています。

○岩橋総務部長

地元の子どもたちの学研研究施設への就職については、今のところ情報がありませんが、ぜひキャリア教育や町広報誌などでも登場していただきたい。

○細川教育委員

親の世代から見ると、一番人数が多かった時代の子ども達が、今20代半ばから後半ぐらいで、まだまだこれからではないでしょうか。

○木村町長

今、地方分権で言われている地方創生ですね。地域が元気になるということ、そのことがいかに大事か、まさにここで教育を受けた子どもたちがこの地域で貢献してもらおうような、そういう場を何としてでもつくりたい。そこに生活拠点を置い

て地域が活性化していく、そのことを考えない限り地方創生はあり得ないと考えています。2年や3年で地域が元気になるということは到底不可能ですが、すばらしい条件がそろった地域ですからこれをどう生かすか、まさに教育もそうだと思います。

○中谷教育委員長職務代理者

科学体験プログラムの中に農業もあっていいのではないのでしょうか。理科の中ではそういう単元あり、植物という単元があるが、そこまで詳しい科学的なことは教えないと思うので、農業も精華町の重要な産業でもありますので、将来の農業を背負っていく子どもたちも含め、「あっ、農業って科学なんだな」とか、こんな楽しみもあるのではと思いました。

「せいか舎」プロジェクトについて感じたのは、昔の道具から家族の話題が上がり、技術の進歩も含め、歴史の流れも学べるということ、もう一つは、例えば「張り板」などは、家庭科の実習もありますので、昔の生活や苦労を味わうことも大切かなと思います。

○太田教育長

これらの活動は、「科学のまち子どもたちプロジェクト」と言う町の新しい魅力と、「せいか舎プロジェクト」という町の長い歴史の中で生まれてきた文化と言う2本柱で進めることに非常に意味があると思っている。冊子「せいか歴史物語」などの中から簡易に精華の歴史を調べ、体感できるというようなものになればよいとも思います。

○鶴飼コーディネーター

「せいか歴史物語」や文化財の写真、住民の方からご提供いただいた写真をまとめたものなど、全てデジタル化しており、著作権などを確認しながら、順次、公開していきたいと考えています。

「科学のまちの子どもたちプロジェクト」の取り組みでは、学校でもない、塾でもない教育の場で子どもたちが目を輝かせて熱中しています。実は昨日、初めてKICKで大学生たちが指導するロボット教室を開催しましたが、1時半から始めて6時まで、休み時間なく教室を開催しました。子どもたちがそれだけ集中してやる教育の場をぜひ見に来ていただきたいと思います。

このロボット教室では学んだ中学生たちが、今度はスタッフの一員として小学生の指導にあたる、そういった世代間の循環というものが一番大事なことで、それを実現できるよう進めたいと考えています。

(4) 閉会

総務部長が第1回総合教育会議の閉会を宣言。